

あとがき

日々の仕事に追われ、教員として大切にすべき授業研究に時間が割けず、授業が終わった後、大きなため息をついている自分に気がつくことが良くあります。教員の多忙化が社会問題となっている昨今では、多くの教員が経験していることではないでしょうか。そのような状況の中、小学校から大学までの20代から60代のさまざまな経歴を持った教師が集まり、60本の授業実践を上下巻2冊で上梓することができました。授業を記録して原稿化する作業は、授業の向上に資するということがわかっているにもかかわらず、かなりの時間と労力を費やしたことも事実です。

しかし、授業を実践する者にとって、先行する実践記録があれば、授業づくりの貴重なヒントになることは間違いありません。そもそも授業に失敗というものがあるのでしょうか。主観的には、ああしたかった、こうしたかった、けれどもうまくできなかつたという思いはあるでしょう。しかしながら、前向きに授業に取り組む限り、授業に課題はあっても、失敗はないのではないかと考えます。その課題を自覚して、先行する実践に学んでこそ、より良い授業ができるのではないのでしょうか。

さて、その授業をめぐる、最近最も注目されているのは、アクティブラーニングの動向です。小中学校は2017年に、高等学校は2018年に新学習指導要領が告示され、全ての教師に対して「主体的・対話的で深い学び」、いわゆるアクティブラーニング実現のための授業の工夫や改善を求めています。

一方、歴史教育者協議会に集う私たちは、「子どもにねざす」授業実践を追究してきました。「子どもにねざす」授業実践とは、子どもを取り巻く現実を見据えながら、子どもの生活実感を踏まえ、子ども自身が課題を見つけ、子どもどうし話し合い活動や探究活動を通して、子どもたちが社会認識や歴史認識を深めていく実践です。

本書に収録された60本の授業実践に通底しているのは、子どもたちが授業に主体的に取り組むためにはどうしたら良いのかという明確な問題意識を持ち、紙上討論も含め授業のなかでの生徒の発言を丁寧に分析し、社会認識や歴史認識の深まりを論証しようとしていることです。本書はこうした観点に立って書かれた授業実践集です。そこに注目していただき、明日の授業づくりのヒントとして、1つ1つの実践記録を読んでいただくことを願ってやみません。

編者一同